

パリDAC通信

第106回「援助構造、開発協力のグローバルガバナンス」(2010年8月30日)

DACの会合では、開発分野の他の会合に負けず劣らず、多くの専門用語が飛び交っています。議論に参加していないと意味はさっぱり分からないのですが、議論に参加しても意味が分かるとは限りません。実際、意味がよく分からない中で議論に参加している人も沢山いるのではないのでしょうか(私もその一人かも)。そういった専門用語の中で、最近よく使われる用語が「援助構造 (aid architecture)」と「開発協力のグローバルガバナンス (global governance)」です。今回は、これらを取り上げたいと思います。

まず、これらの用語はどのように使われているのでしょうか。2010年3月に開催されたボゴタハイレベルイベントは、開発途上国側の視点を尊重した国際会議でしたが、その目的の1つは、開発途上国側の声を「グローバル援助構造」の中に反映させることでした(注1)。「援助」は日本や米国などのドナー国、世銀や国連機関などの援助機関、ゲイツ財団や国際赤十字などの民間非営利団体などにより提供されていますが、「援助構造」とはそれらをまとめた全体の仕組みのことです。「全ての援助」と言えば分かりやすいのかもしれませんが、援助は国連ミレニアムサミットなどの国際会議や各国の政策により一定の方向づけがなされるため、そのような「仕組み」に着目して「援助構造」と呼ばれるのだと思います。一見するとそれぞれが勝手に行っている援助でも、何らかの仕組みが存在し、構造があると考えるのだと思います。

次に、「開発協力のグローバルガバナンス」という用語はどのように使われているのでしょうか。世界の専門家が10年から15年先の世界の状況を見据えてDACのあるべき姿を提言した「DACリフレクション作業報告書」(注2)は、DACに対して、「開発協力におけるグローバルガバナンス改革への積極的な関与」を勧告しています。上述のとおり、多くの援助は国際会議や各国の政策などにより一定の方向づけがなされますが、方向づけ以上に制度やルールなども決められることがあります。例えば、多くの国が参加する世銀やIMFの総務会や理事会では、多額の援助に関する制度が決まります。世銀の資金を活用している世界中の多くの団体は、これらの制度に沿った援助を行うこととなります。このように世界的な援助(またはより広義の開発協力)に関する意思決定が行われる仕組みを「グローバルガバナンス」と呼んでいるのだと思います。

では、なぜこれらの用語が最近のDACにおいて飛び交っているのでしょうか。それは、DACの妥当性が議論されているためです。開発の世界では、DACに加盟しているドナー国以外にも、中国やブラジルなどの非DACドナー国、ゲイツ財団などの民間非営利団体、そして開発途上国という市場に関心を持つ民間企業などの開発アクター (development actors) が存在し、これらの国・団体数や資金量は以前と比べて大きく増加しています。以前はDACの場においてルール(例えばODAの定義、アンタイド援助の勧告、各種のガイドライン)を決めていれば開発アクターのほぼ全てに影響があったのですが、現在はそうではありません。DACで決めたことは、これまでのようには「援助構造」に影響を与えないのではないかと、DACは「開発協力のグローバルガバナンス」でありえるのだろうか、といった問題意識が存在しています。

最後に、この問題意識に関する、DAC事務局のワーキングペーパー(注3)をご紹介します。同ペーパーは、国際開発におけるグローバルガバナンスの重要性を指摘し、次に同ガバナンスが効果的な援助の実施に果たせる役割を検討し、最後に既存の4つのガバナンス組織(ブレトンウッズ機関、国連、DAC、DAC援助効果作業部会)を比較分析しています。疑問に思うところもありますが、ご興味のある方はぜひ参照してみてください。

(パリDAC通信: 上野 修平)

注1: http://www.oecd.org/document/27/0,3343,en_2649_3236398_44577307_1_1_1_37413,00.html

注2: <http://www.oecd.org/dataoecd/14/1/43854787.pdf>

注3: <http://www.oecd.org/dataoecd/34/63/45569897.pdf>